

はじめに

この報告で取り上げる『日本マルクス主義文献』は、戦前の大原社会問題研究所で1929年に作成され、大正から昭和にかけての1919年～1927年までの範囲でマルクス主義文献を採録する文献目録である<sup>i</sup>。この時期の日本は言うまでもなく戦前の思想統制下にあり、マルクス主義文献の刊行は自由ではなかった。検閲による伏字、発禁処分、また執筆者や活動家の検挙も大規模に行われた。戦争の激化と敗戦に向けて、日本のマルクス主義は言論においても運動においても国家権力による過酷な弾圧のもとで窒息させられていくことになる。

しかし、既に指摘されているように、こうしたイメージで戦前のすべてを塗りつぶすことはまったくできない。梅田俊英氏の研究によれば、「戦前の出版は国家権力によって厳しく規制されていた。しかし、戦前の一定時期においては相当広範に反政府、反国家、反社会体制の言論が成立しえた」としている。発達を遂げていくマスコミにたいして、検閲する側の事務官の決定的な人手不足が事前検閲をいわば機能不全に陥らせていたという。状況が大きく変わるのは1933年以後であり、戦時体制に向かいつつ出版統制が徹底されていくと指摘している<sup>ii</sup>。

『日本マルクス主義文献』に記録された数多くのマルクス主義文献のタイトルは、こうした見方を裏付けるものといえる。採録されたマルクス主義文献のタイトル数は一我々の作成した復刻版<sup>iii</sup>において一実に約900点にのぼる<sup>iv</sup>。採録から漏れた文献もかなりあると思われ、また採録期間に該当しない1930年代初めにもマルクス主義文献が数多く刊行されたことを考えれば、この当時にはまさにマルクス主義文献の一大ブームが存在した。

従来、この時期のマルクス主義文献の隆盛には言及があるものの、実際に何の文献が刊行されていたのかについては、必ずしも十分な資料があったわけではない。この点で研究史における空隙を埋める資料的価値がこの『日本マルクス主義文献』にはあるだろう。

この報告では、報告者らが翻刻した新資料『日本マルクス主義文献』を用いて、1920年代のマルクス主義文献の刊行の様相を示すとともに、この時期のマルクス・ブームをマルクス主義文献の大衆化という視点からも捉えてみたい。

## 1、1920年代のマルクス主義文献出版の隆盛

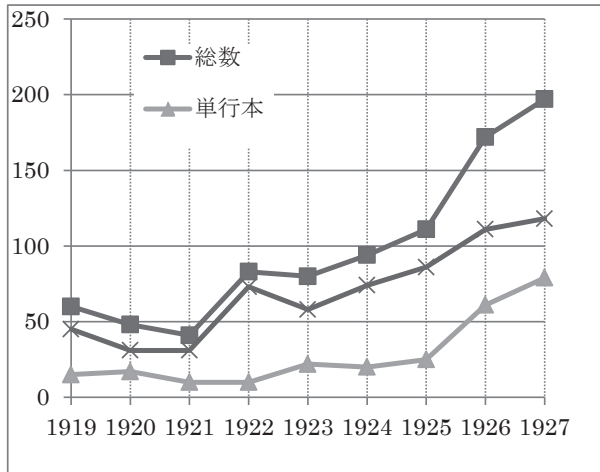
戦前の日本におけるマルクス主義の普及は、1919年前後をひとつの画期としている。ロシア革命(1917)、米騒動(1918)、また労働運動の高揚を背景に、マルクス主義への注目が高まり、1919年に雑誌『改造』、『我等』などマルクス主義文献を掲載する重要な雑誌が相次いで現れ、1920年代から1930年代前半にかけて、マルクス主義文献が盛んに刊行されることになる。『日本マルクス主義文献』が採録する時期は1919年～1927年までであるから、このマルクス・ブームのおよそ前半を捉えていることになる。

## 2、採録された雑誌および叢書などのシリーズもの

『日本マルクス主義文献』が採録する雑誌の幅広さは特筆すべきものがある。採録対象となった雑誌類は実に 77 誌にのぼり、学術誌、総合雑誌、機関誌など多彩である。ただし、目録に文献 1 点のみが記載されている雑誌もあり、頻繁にマルクス主義文献が掲載された『我等』や『改造』との掲載数の差は大きい。

また、この当時にはさまざまな叢書、講座、全集等のシリーズものが刊行されており、『日本マルクス主義文献』にも 36 の実に多彩なシリーズ類が含まれている。『経済学説体系』(而立社)といった学術的なものから、より大衆向けの簡単なパンフレットまで、諸種のシリーズものの単行本が採録されている。(これら雑誌類、シリーズ類のリストは既に公表したものを更に補完し、ウェブ上で公開するので割愛する v。)

## 3、刊行年別グラフ



この時期のマルクス主義文献の刊行状況がどんなものであったかを、翻刻版の書誌データを用いて示してみたい。年別の刊行点数グラフを作成するとグラフ 1 のようである vi。グラフ 1 は発行形態を単行本と雑誌にわけ、年別の刊行点数をグラフ化したものである。1919 年から見れば、1927 年の刊行点数は約 4 倍に増加している。また、1925

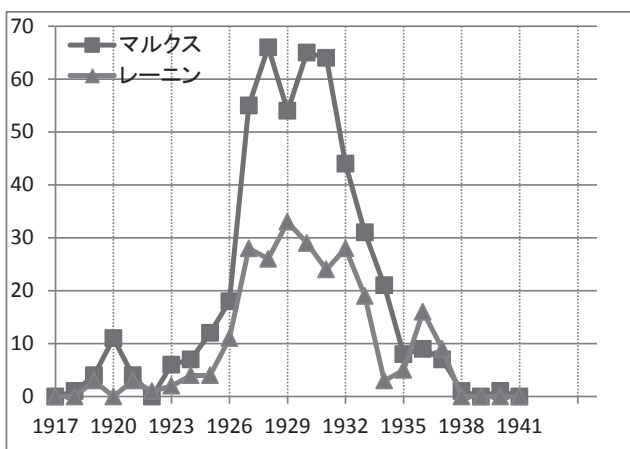
グラフ 1 出典 翻刻『日本マルクス主義文献』web 版のデータから作成

年から 1927 年にかけて刊行点数が伸び、約 2 倍になっている。

ブームの頂点に向かう刊行熱の高まりの様相をこのグラフから伺うことができよう。

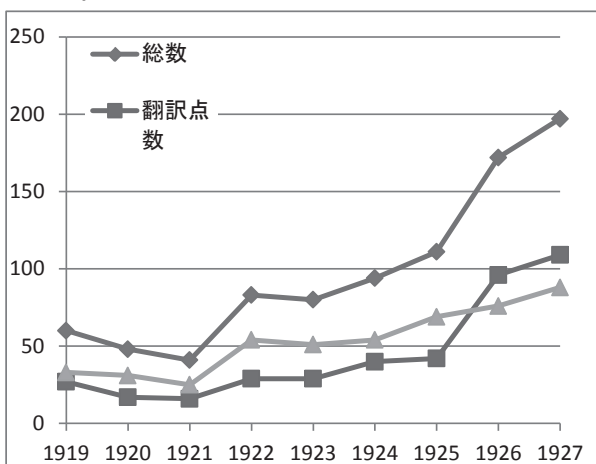
既に述べたように、『日本マルクス主義文献』は 1927 年までの採録範囲であり、この時期のマルクス・ブームの前半を捉えるものであるが、これだけでは全体が見えないため、参考までに次のグラフを掲げよう。

グラフ 2 は、国立国会図書館の所蔵情報のデータベース (NDL-OPAC) で「マルクス」と「レーニン」でタイトル検索した結果を加工したものである vii。マルクス主義文献の一部の刊行状況の、それもおおまかなグラフではあるが、この時期のマルクス・ブームの盛衰を類推することはできよう。おおむね 1926 年前後から 1933 年前後がマルクス主義文献の隆盛期とみなせる時期ではないだろうか viii。このグラフ 1, 2 を重ね合わせれば、『日本マルクス主義文献』の採録期間は、このマルクス・ブームの前半期であることが確認でき



グラフ 2 NDL-OPAC (国立国会図書館) の検索結果を基に作成

よるマルクス主義理解の進行など、翻訳文献の刊行はマルクス主義普及の主要な柱の一つである。



グラフ 3 翻刻『日本マルクス主義文献』web版のデータから作成

行をはじめた年とされる。マルクス／エンゲルスの原著では『資本論』第1巻がまず松浦要によって(経済社)、次に生田長江によって(緑葉社)翻訳されたのが1919年の最大の話題であろう。松浦は『賃金、価格、利潤』も翻訳している(『マルクス経済学要旨』、経済社)。解説書では高島素之によるカール・カウツキー『マルクス資本論解説』が売文社から刊行されているほか、ジョン・スパーゴラの伝記が翻訳されており<sup>5)</sup>、点数は少ないものの入門的な原典と解説文献が翻訳されている。1920年では、大鏡閣の『マルクス全集』が刊行を開始し、周知のように高島素之による日本初の『資本論』全訳が行われていく(出版社を而立社に変えて1924年まで続く)。同じく『マルクス全集』(山本義人、中央出版社)

よう。

#### 4、翻訳の占める割合の変遷

マルクス主義の日本への導入・展開において、マルクス／エンゲルスの原典の翻訳やヨーロッパのマルクス主義文献の翻訳は特別な位置を占める。マルクス主義が外来思想である以上は、日本における本格的な受容、定着においては、翻訳

される術語の定着をはじめ、解説的な文献の翻訳に

『日本マルクス主義文献』の採録文献中、約46%を翻訳文献が占める<sup>6)</sup>。ここでは『日本マルクス主義文献』に採録された約900点の文献を対象にして、翻訳の占める割合の変化をグラフ3で示し、若干の解説を加えたい。

このグラフ3で特徴的なことは、1926年に翻訳点数が翻訳以外の点数を上回ることである(1925年の翻訳の占める割合は約38%だが、1926年には約56%である)。

1919年は日本でマルクスが流

と銘打った単行本も刊行されている。エンゲルス単体の文献の翻訳がこの年から見られ、『反デューリング論』などが河上肇（『社会問題研究』17冊）、また遠藤無水（『科学的社会主義』、文泉堂）によって部分的に翻訳されている。1921年では、河上肇によるマルクスの『賃労働と資本 賃、価格及び利潤』（弘文堂）、堺利彦によるエンゲルス『空想的及科学的社会主義』（大鏡閣）があり、やはり入門書性格の原典が翻訳されている。

紙幅の都合から、ここからはマルクス／エンゲルスの原典の翻訳に絞り、書誌情報は割愛して簡単にコメントしたい。また短い原典以外は部分訳が多いが、特に断らないことにする。1922年は『家族、私有財産及び国家の起源』、『フランスにおける内乱』、『フランスにおける階級闘争』、『哲学の貧困』からの翻訳がなされ、また『フォイエルバッハに関するテーゼ』も紹介されている。1923年は『経済学批判』、『聖家族』などの部分訳が行われる。1924年からは翻訳の点数もやや増加する。『ユダヤ人問題』、『ゴータ綱領批判』、『ヘーゲル法哲学批判』、『国民経済学批判大綱』、『革命と反革命』など、またわずかではあるが書簡や国際労働者協会の声明なども扱われ、翻訳の範囲が徐々に広がっていく。1925年では、大原社会問題研究所による『剰余価値学説史』の刊行が始まる。また『フォイエルバッハ論』、クーゲルマン宛書簡やルーゲ宛書簡も翻訳され始める。1926年になると大幅に翻訳点数が増加し、また翻訳の範囲もさらに広がっていく。マルクス／エンゲルス往復書簡、C.シュミット宛書簡、W.ボルギウス宛書簡、V.アドラー宛書簡、ザスーリチ宛書簡、クーゲルマン宛書簡などの一部が翻訳され、また『ニューヨーク・トリビューン』に寄稿したマルクスの論説の翻訳が始まっている。1927年も前年の勢いを維持している。これまで掲げた諸文献の刊行が継続されながら、『ドイツ・イデオロギー』、『猿の人間化における労働の役割』、『デモクリットとエピクルスとの自然哲学の差異』、『国際労働者協会創立宣言』、ヨハン・モスト『資本論略解』なども翻訳が始まっている。また、書簡や『ニューヨーク・トリビューン』への寄稿についても翻訳されている。参考に、1927年のマルクス／エンゲルス原著の翻訳を表にしたものを掲げておく（表1）。

1928年には、改造社から『マルクス・エンゲルス全集』が刊行され、マルクス・ブームのひとつの頂点を迎える。1927年までのこれら多数のマルクス／エンゲルス原著の翻訳の存在は、いわばそれを準備していくものとみなせるだろう。

1927年（表1）

フォイエルバッハ論／石川準十郎	反デューリング論／石川準十郎 ／河野密・林要	経済学批判序説／河上肇・宮川実
ゴータ綱領批判（改訂）／水谷長三郎	剰余価値学説史（一部）／杉田欣一	剰余価値学説史（一部）／菱美憲
マルクスの『経済学批判』について／経済学批判会	哲学の貧困／経済学批判会	経済学批判序説／経済学批判会
マルクスよりクーゲルマン宛書簡（1868年7月2日）／経済学批判	聖家族／経済学批判会	ドイツ・イデオロギー／経済学批判会

判会

反デューリング論／経済学批判 ドイツ農民戦争／西雅雄 哲学の貧困／高島素之

会

自由貿易論／高島素之 権威について／服部之総 ニューヨーク・トリビューン  
から論説 7 編／大内兵衛

資本論初版首章／河上肇・小林 独仏年誌（抄）／嘉治隆一 賃労働と資本（岩波文庫）／  
輝次 河上肇

デモクリットとエピクルスとの 資本論略解（ヨハン・モスト） フランスとドイツにおける農  
自然哲学の差異／服部英太郎 ／嘉治隆一 民問題／宗道太

ドイツ・イデオロギー／森戸辰 剰余価値学説史（続き）／大内 国際労働者協会創立宣言／早  
男 兵衛 野三郎

空想から科学への社会主義の発 エングルスより Y.ベッカー宛書 反デューリング論／平野義太  
展 英語版序文／吉山道三 簡（1877 年）／小宮義孝・喜多野  
清一 郎

エンゲルスより C.シュミット 家族、私有財産及び国家の起源 猿の人間化における労働の役  
宛書簡（1889-1895 年）／久留間 ／西雅雄 割／黒田房雄

鮫造

剰余価値学説史（一部）／玉城 マルクスよりザスーリチ宛書簡 革命と反革命／由利英一  
肇 （1881 年）／山村喬

ニューヨーク・トリビューンか 資本論第 1 巻（改造社）／高島 資本論第 1 巻（岩波書店）  
ら論説 4 編／小林良正 素之 ／河上肇・宮川実

## 5、マルクス主義文献の“大衆化”

マルクス主義の普及は、社会科学としての学術的受容、また政治的・思想的運動体における受容のもとで進んできた。後者においては大衆の獲得が組織的目標となる。そこでは大衆を組織する手立てとしてのマルクス主義思想の普及が運動のひとつの柱となり、その役割をもったマルクス主義文献が刊行されたり、読書・学習案内が作成されることになる。同時に、マルクス・ブームという状況においては、必ずしも党派的とは思われない一般向けのマルクス主義文献も刊行される。『誰にもわかるマルクス資本論』（樋口麗陽、1919 年）などはその例であろう。報告の最後では、従来、ほとんど取り上げられてこなかったこうした大衆向け、一般向けのマルクス主義文献に着目して、日本におけるマルクス主義（文献）の大衆化の様相を探る試みをしたい。

i この目録の作成経緯については大村泉「高野岩三郎と『日本マルクス主義文献』」（マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究、第 39 号、2002 年）が最も詳しい。また拙稿「翻刻『日本マルクス主義文献』web 版の公開によせて」（大原社会問題研究所雑誌 617 号、2010 年）では採録雑誌など目録の概要を記している。他の目録との比較は拙稿「大原社会問題研究所『日本マルクス主義文献』（未刊行）の意義」（同、559 号、2005 年）参照。

ii 梅田俊英『社会運動と出版文化』、お茶の水書房、1998年、9-11頁。梅田氏はもとより、この報告でも戦前期において出版の自由があったというつもりは毛頭ない。ただ、言論統制下にあってもその実際の規制と弾圧の程度は一樣ではなく、ブームといえるマルクス主義文献刊行の隆盛期が戦前にあったことは事実である。

iii 翻刻『日本マルクス主義文献』web版。ウェブ上で暫定版を公開している。

<http://www.ric.hi-ho.ne.jp/jlme/> または「日本マルクス主義文献」で検索。翻刻・Web版は、報告者のほかに、玉岡敦（東北大学大学院院生）、川村哲也（神奈川大学准教授）、大和田寛（仙台大学教授）によって作成した。

iv 『日本マルクス主義文献』の採録点数は757点であるが、翻刻・web版ではサブタイトルを収録するため連続論文やシリーズもののタイトルを一括せずに個々に掲げていること、連続論文の記載漏れを補完したことなどで、点数がかなり増加している。

v 前掲拙稿（2010年）参照。リストは、修正・補完の上、前記サイトで公開する。

vi ここで用いる翻刻版のデータは、タイトル数で886点である。以下同様である。

vii 復刻版については現物を実見して書誌情報を確認しているが、このデータは書誌情報のみの利用であること、またマルクス主義文献がすべてヒットするわけではないことなどに留意すべきである。また、これは単行本のみが対象であり、雑誌論文は除外されている。こうしたことから、あくまでも全体をおおまかに見るうえでの参考であることをお断りしたい。

また、グラフ2では参考までにレーニン文献を入れたが、『日本マルクス主義文献』にはレーニン関連の文献はごく一部しか入っていない。

viii このグラフからみたブームの終息時期は、取り方にもよるが1934-35年にも見える。だが確たることはこのグラフからはいえない。それでも梅田氏の見方（1933,34年頃に終息）と多少ずれるがほぼ一致する。前掲梅田、25頁。

ix 当時の文献には原著者を明示していない可能性や『日本マルクス主義文献』での原著者項目に脱漏がありえるため、文献内容を精査していけば変動する可能性がある。

x 村上正雄訳『マルクス伝』（1, 2）三田書房 [*Karl Marx, his life and work*. Spargo, John] など